

2013年度 大阪経済法科大学 秋学期末試験答案用紙

【問題1】 経法工場では、予算の作成に信頼する基礎を提供し、かつ原価管理を効果的にするために、標準原価計算制度を採用している。次の資料に基づいて、差異分析を行いなさい。(60点：5点×12)

[資料]

1. 年間予算データ

(1) 製品の予算販売単価と年間予算生産・販売量

予算販売単価	19,000円
年間予算生産・販売量	24,000個

(2) 製品1個あたりの標準製造原価

① 直接材料の標準単価と標準消費量

標準単価	500円	標準消費量	10kg
------	------	-------	------

② 標準賃率と標準直接作業時間

標準賃率	1,000円	標準直接作業時間	3時間
------	--------	----------	-----

③ 製造間接費

製造間接費は直接作業時間を基準として標準配賦される。なお、製造間接費には公式法変動予算を設定しており、変動費率は800円/時間、年間固定費予算額は、64,800,000円である。また、年間の基準操業度は72,000時間である。

(3) 販売費および一般管理費年間予算額 36,000,000円

2. 当月実績データ

当月の実際生産・販売量は1,850個であり、原価要素ごとの実際発生額は以下のとおりであった。

① 直接材料の実際単価と実際消費量

実際単価	510円	実際消費量	18,100kg
------	------	-------	----------

② 実際賃率と実際直接作業時間

実際賃率	1,020円	実際直接作業時間	5,500時間
------	--------	----------	---------

③ 製造間接費実際発生額 9,300,000円

直接材料費総差異	円	(有利・不利) 差異
価 格 差 異	円	(有利・不利) 差異
数 量 差 異	円	(有利・不利) 差異
直接労務費総差異	円	(有利・不利) 差異
賃 率 差 異	円	(有利・不利) 差異
時 間 差 異	円	(有利・不利) 差異
製造間接費総差異	円	(有利・不利) 差異
予 算 差 異	円	(有利・不利) 差異
変 動 費 能 率 差 異	円	(有利・不利) 差異
固 定 費 能 率 差 異	円	(有利・不利) 差異
操 業 度 差 異	円	(有利・不利) 差異
標準製造原価差異	円	(有利・不利) 差異

科 目	教員名	学籍番号	氏 名	採点
30770 工業簿記	2062 山根 陽一	入学年度 E・L 番		

(裏面使用のときはこの位置を上段にして記入すること)

【問題2】 次の資料に基づき、以下の設問に答えなさい。(40点：5点×8)

[資料]

1. 販売単価 @1,000円
2. 製品1個あたりの実際製造原価
 - (1) 材料費 @300円 (全額変動費)
 - (2) 労務費 @240円 (全額変動費)
 - (3) 製造間接費 @100円 (うち@40円が変動費)
3. 販売費および一般管理費
 - (1) 変動販売費 @20円
 - (2) 固定販売費及び一般管理費 2,400,000円
4. 当月生産量は 20,000個であり、製品・仕掛品とも月初・月末の棚卸高はなかった。
5. 当月の基準操業度は 20,000個であり、固定費は予算通り発生した。

設問1. 損益分岐点売上高および販売量を求めなさい。

売 上 高	円
販 売 量	個

設問2. 目標営業利益 1,000,000円を達成するための売上高および販売量を求めなさい。

売 上 高	円
販 売 量	個

設問3. 販売単価を @1,200円としたとき、損益分岐点売上高および販売量を求めなさい。

売 上 高	円
販 売 量	個

設問4. 販売単価を @1,200円としたとき、目標営業利益 1,200,000円を達成するための売上高および販売量を求めなさい。

売 上 高	円
販 売 量	個